

鼻中隔彎曲症の飛行士に及ぼす障碍

笹 木 實

日本臨床1巻3號 362 (昭和 18 年 8 月)

鼻中隔彎曲症は飛行士により種々の障碍を及ぼすものなるが特に氣壓の急變に際しては一層重大なる障碍を惹起するものと考えらる。症例、24歳の新聞社所屬飛行士、急降下直後急に左側耳痛、耳鳴、耳閉塞感を訴へ來たる。診るに鼓室内液體瀦溜を鼓膜より透視す。鼻腔検査にて高度の左側鼻中隔彎曲症を認めたり。其後飛行士にして耳鼻の障碍を訴へ需診せし5症例に於ても可成高度の鼻中隔彎曲症が認められ且彎曲側のみの耳症状を訴へたり。一般に鼻中隔彎曲症を有する者にては彎曲側の耳管が閉塞し易く、強度の氣壓の變化に依り急激に鼻閉、耳管の閉塞を來し、之が爲鼓室内に強度の陰壓を生じ、その結果耳痛、耳鳴難聴等、時には眩暈すら惹起すと考へらる。其他急降下に際し往々上顎前頭部の劇痛を訴へ、A-Herrmann 氏は上顎竇及前頭洞粘膜下に血腫の形成を確認し更に鼻中隔彎曲あるを明記せり。又鼻中隔彎曲症は所謂鼻性反射神經症状を惹起し更に早期疲勞の原因となり飛行に大なる支障を來す故、本症を有する飛行士に矯正手術を施行すれば飛行の能率を増進せしめ、更に航空事故防止に役立つ。又本症が原因となりて飛行の適性検査に不合格なりし者が手術後治療に依り適格性を附與し得るものと思はる。(小泊抄)

喉頭結核に於ける動物實驗的觀察

張 溫 流

臺灣醫學會雜誌 42 卷 7 號 867 頁 (昭和 18 年 7 月)

實驗材料として臺灣猿に人型結核菌を用ふ。第1群血管内感染實驗、結核菌 0.01~2.0mg の食鹽浮遊液を以て猿の右側總頸動脈に注入せる 15 例。第2群。肺臓内實驗、結核菌 0.01~1.0mg 直接肺臓内に注入せる 12 例。第3群。粘痰塗布實驗、結核菌 1.0~2.0mg をグリセリンにて浮遊液とし喉頭觀視の下に粘痰塗布を行へる 9 例。第4群。粘膜下接種實驗、結核菌 0.01~1.0mg を喉頭假聲帶粘膜下に注射せる 6 例。實驗成績。全群に於て消長あるも全身的には體溫上昇、「ツ」皮内反應陽轉、赤沈促進、血液像は Leucopenia

を呈す。局所的には第1群は 15 例中 13 例に發赤、腫脹、肥厚、點狀結節糜爛を認め、該病變は喉頭後壁に多く、次に會厭、前連合、聲帶、假聲帶、披裂部の順なり。又病變は 12 例に接種側に、3 例に於ては反對側にも認めたり。組織的には 14 例に於て結核病變を認む。尙分泌物中よりの菌陽性 4 例。第2群は喉頭各部分に發赤、腫脹、浸潤、肥厚を認めたり。剖檢によるに各例共に結核菌瘻あり。10例は大小の空洞を接種肺側に認む。第3群は喉頭に於ては 6 例に第2群同様の變化が不定に現はれ居り、剖檢するに 6 例に結核病變を認め、組織的には 1 例丈病變を認めたり。分泌物中の菌證明は全例共に接種翌日は陰性となるも 3 例に於て末期に陽性となりたり。第4群は喉頭接種部は發赤、腫脹を呈す。非接種部位にも發赤、腫脹現はるも短期間に消褪せり。接種部に 2 例、腫瘍を形成し 1 例は瘻孔を生ず。剖檢するに兩側頸部淋巴腺に結核性變化を 3 例に認む、肺に粟粒結節惹起せるもの 3 例、空洞形成 1 例なり。組織的には全例共に結核性肉芽腫を認む。以上の結果よりして肺病變と喉頭病變との相互關係は區々にして一定の平行關係は發見されず。喉頭結核の感染経路は血行性が最高率を示せり。(財前抄)

鼻出血診療の一端

畑 秀 雄

醫界週報 423 號 (昭和 18 年 5 月)

429 號 (昭和 18 年 6 月)

昨年 1 年間に診療せし小兒の偶發的鼻出血例に就て試みし調査の結果を述べたり。

小兒症例 17 例中、原發性鼻腔デフテリー 10 例、鼻咽頭「デ」1 例、急性乃至亞急性鼻加答兒 4 例の如く局所的原因に依るもの大部分にして而も鼻腔デフテリーが殆んどを占め、異物、創痙性鼻炎等に因る鼻出血例は甚だ少し。鼻腔デフテリー症例に於て鼻出血を主訴とせざるもの少數あるも、臨床的所見は鼻出血を主訴としたものと差異を認めず。

原發性たると續發性たるとに拘はらず、小兒の鼻腔デフテリーに依る鼻出血は其の量多からず、局所的止血處置を要せし者なし。唯稀有なる成人の 1 例に於ては出血多量、壓迫タンポン及びクローム酸球燒灼等施行せしが何れも血清注射の効果と共に容易に治癒せ